慶應義塾大学学術情報リポジトリ
Keio Associated Repository of Academic resouces

Title	利光先生を偲ぶ
Sub Title	
Author	松田, 和晃(Matsuda, Kazuaki)
Publisher	慶應義塾大学法学研究会
Publication year	2010
Jtitle	法學研究 : 法律・ 政治・ 社会 (Journal of law, politics, and sociology). Vol.83, No.4 (2010. 4) ,p.177- 179
JaLC DOI	
Abstract	
Notes	利光三津夫先生追悼記事
Genre	Journal Article
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00224504-20100428-0177

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

とから始まるが、学問は疑うことからはじまるのよ」と明快に言い切られた。

皇位継承問題を扱うようになって、なぜ意見は男系と女系に分かれるのか考えていたが、この利光先生の言葉が疑問を見事に氷解させた。

そうか、男系墨守を唱える神社本庁や神道政治連盟は伝統を重視し、神を信じてひたすら祈っているのだ。われわれ研究者や官僚は皇統の存続のため、有効性、合理性の観点から「皇位継承資格の女性・女系への拡大」を提唱しているのである。

信仰、信念、情念の人に理屈は通用しない。合理主義がいつも正しいなんて、そもそも傲慢なのである。利光先生のおかげで、考察はどんどん深まる。伝統のもつ非合理性をわれわれも敬意をもって考え直す必要がある。

利光先生は学問一途であられた。深夜、根を詰められると、笛の音が聞え、女性が姿を現すそうである。もちろん医者は幻聴、幻覚でかたづけるだろうが、なんとも凄まじい学者魂である。利光先生に心より感謝申し上げ、衷心よりご冥福をお祈り申し上げる。

法学部教授　笠　原　英　彦

利光先生を偲ぶ

申し訳のないことではあるが、私が利光先生のお教えを受ける契機となったのは、自らの意志によったものではなかった。当時、師事していた東京国立博物館のI先生のもとへ、慶應の大学院へ進むとの報告をしに行ったところ、I先生は、私の専攻を聞くより先に、「慶應ならばまず利光先生に法制史を学ばなければいけない」と仰り、その場で利光先生に電話を入れて、私の入門を依頼して下さった。利光先生のお名前は、こうした異分野の世界にも鳴り響いていたのである。

さて私が弟子入りを許されて先生のお宅に参上すると、書斎の机の上に一尺四方ほどの桐箱が置かれていた。命ぜられるままに真田紐をほどいて蓋をとれば、銀色に輝く一枚の鏡が納められていた。「どう見るか」とのお声に、返答に窮しながらも「鏡面を拝見してよろしいでしょうか」とお尋ねし、お許しを得てから、指紋がつかぬよう留意しつつ徐に縁に指をかけて裏返そうとした瞬間、

「気に入った」との大音声が響いた。先生の仰るには、大抵の者はこうしたものを無造作に扱おうとするが、遺物が今日まで伝来しえた背景には、如何に数奇な偶然の繰り返しがあったことか、そして持ち主がどれほど苦労して蒐集したかに思いを致すならば、どのような種類の資料であれ疎かに扱うことは出来ぬ筈であり、先程の私の所作は全く歴史研究者たるに適うものである、というのである。あらためて先生の書斎の中を見回せば、古今東西の学術資料が、これまた万巻の書物の隙間から顔を出し、両者渾然としてまことに不可思議な雰囲気を醸し出していた。先生が古銭の鑑識眼にかけて斯界で一二を争うほどの趣味人であることは耳にしていたが、他の歴史的資料についても、お若い頃からずいぶん熱意を持って蒐集を続けて来られたという。

爾来、先生の美術館や骨董屋巡りには、必ずといっていいほど同行を命ぜられ、随分と面白い経験をした。絶句するような名品を目にする機会も少なからずあったが、古美術を巡る複雑な人間模様も垣間見、それらは歴史を学ぶ上での感性を磨く好材料となった。十年ほど前に、先生と二人で師走の南都へ赴き、奈良ホテルに投宿して奥様ご紹介の店で晩餐をいただくという、大名旅行をしたことがあった。先生が楽しみにされていた国立博物館はあいにく休館であったが、始まったばかりの興福寺中金堂の発掘現場などをご案内したのち、いくつかの古美術店へ足を向けた。観光客などの人気が絶える時期とて、各店の主人は、初秋の藪蚊さながら、ここぞとばかりに先生の眼前へ珍品奇器と称するものを携えて群がったが、いずれも先生の審美眼に適うものはなかった。特段の収穫もなく店を後にする際、相手の自尊心を傷つけぬような壺を心得た謝辞を、さりげなく店主にお掛けになるご様子は、いかにも先生のお人柄がよく現れていて、あと数日で歳が明けようという厳寒の三条通りを、なにか心嬉しく歩いたことが思い出される。

晩年、先生のゼミ一期生の方が、勤め先を定年退職したのち、若き頃に先生から受けたお教えの内容をさらに究めようと、私の大学に院生として入学して来たことがあった。先生はこの方をご自分の最後の弟子と称され、私と二人三脚でよくご指導下さり、八年がかりではあったが、昨春、博士学位の授与に漕ぎつけた。その際、先生は快く審査委員の一人に加わって下さったが、ご他界の僅か半年前に記されたその審査報告書には、ご高齢にも拘わらず、流麗な文章で展開された緻密で冷徹なまで

の批評が、やや解読しにくい「六朝風」と自称する筆跡で認められており、その筆勢は四半世紀前の私の学位審査の時と全く異なることがなかった。生前、先生はよく「学問・研究の上で、やり残したものはない」と仰っておられた。着手したものはかならず成果に結びつけ、形として残して来られた、ということであろうが、弟子の育成についても、見事に完結されたのであった。

片言隻語にこそ、よくその人となりが顕れるとも聞く。思えば私は、法制史の学問より遊び事のお付き合いのほうが深い不肖の弟子であったゆえに、先生に師事した三十有余年の間に、学内では窺いしれぬような珠玉のお言葉の数々に接する機に恵まれたことは幸せであった。その一々を記録しておかなかったことは悔やまれなくもないが、そうした類の史料が残りにくいのは世の常であり、にもかかわらず先生が往時の人物の心情をよむに巧みであつたことは、数々のご著書を繙くまでもなく万人の知るところである。

杏林大学総合政策学部長　松田和晃

恩師の遺言、「恪勤匪懈者為一善」

恩師利光三津夫先生が亡くなられたことを電話で聞いて俄かには信じられない思いであった。日曜日の夜、旅先のホテルで知らせを受けた。同じ週で五日前の火曜日の夜、先生に指導していただいた者が集まって長谷山彰君の常任理事就任のお祝いの会を開き、先生のお元気なお姿を拝見し、お話を聞いたばかりであったからである。

今にして思えば、先生はそこに集まった親しい者たちにお別れを言いにお出でくださったのではないか。そう思えてならない。ただそれに気づかなかったのは私が鈍いせいでもあるが、いつものように生活感のある闊達なお話であったからである。

先生に直接教えを受けることができたのは友人藤田弘道・寺崎修両君のおかげである。恩師中村菊男先生が逝かれて、すぐのことである。お家のことで言えば下落合の家に落ち着かれてからである。書いた論文を二階の書斎で見ていただきながらお話を伺うのである。先生は律